

啓発と教育  
—教師の在り方論の一考察—

石野 日出夫

『教育学論集』第70号

(2018年3月)



## 啓発と教育 —教師の在り方論の一考察—

石野 日出夫

### はじめに

牧口常三郎創価学会初代会長（以後「牧口会長」と略す）は『創価教育学体系第4巻』（『牧口常三郎全集第6巻創価教育学体系（下）』1983年第三文明社、以後『創価教育学体系』を『体系』と略す）の中で述べた。

教師の職は知識の切売りか、生徒の学習を指導する技師か。とは三百年の昔コメニウスが教育革新案を提唱した頃からの大疑問であるが、今なほ判然たる見境が付いて居ない。そこに教育の大欠陥が纏つはつて居り、将来の革新を障げる禍根が深く横たはつて居るのである。歴代の文部大臣中、こんな事を考へて帝国の教育を統督した人が果して幾人あつたであらうか、それでも良かったのか。<sup>1</sup> またこうも記している。

もし教師の仕事が前者であるならば、大学教授が卸売り、中等学校の教諭は中卸し、小学教師はその小売り商売といふことにならう。<sup>2</sup>

前者とは、「教師の職が知識の切売り」だという場合を指すが、ここに言われる教師の職への問いかけは、当該時点から90年余りを経た今日、解決の日の目を見たのであろうか。必ずしも答えは明白とは限らない。戦後の民主主義国家における我が国の教育の現状及び教師の実態は、教育改革の歩みはあるものの、特に現場、すなわち教育の最前線たる教師の学習指導の改善及び児童生徒の問題行動の解決が十全になされているとは言い難い。いま文科省を中心に、アクティブラーニングが強調されるのは、現代の教育が詰め込み主義であるとは断定しないまでも、児童中心の学習指導が十分にできていない一つの証左ではないだろうか。また、あらゆる対策をとっても、依然いじめによる自殺は止むことがない。いじめも、教師の学習指導と決して無関係ではない。こうした状況は確かに時代や社会状況の変化にも原因がある。だが、第一線の教師の責任も大きい。そこで自らの問題ととらえる使命感の有無が問われる。いずれにせよ教師の在り様における上記の牧口会長の指摘は時の隔たりを越えて、今日においてなお鋭く迫っている教育の根本問題と言えるのではないだろうか。

いま『体系』を殊更取り上げる意義は何か。なぜ牧口会長に注目するのか。筆者

は松本（2004）の次の考えに共鳴する。すなわち、松本は自身の著書において、没後六十年を経た牧口会長に焦点をあてる理由は「他に比類ない教育学を牧口常三郎が成立させたことにある」<sup>3</sup>と言い、さらにこう記すのである。

当時のカリスマ的国家権力を否定、しかし立憲君主制を尊重して、平和日本の実現のために教育改革に取り組もうと、大著を世に問うた教育者がいた。これが牧口常三郎なのである。<sup>4</sup>

また熊谷（1994）も、『体系』の現代的意義に触れ、次のように記している。

『体系』には、今日の時代でも深刻な問題の一つである受験競争、学卒者の就職難が扱われ、教育権の確立・立憲主義的（民主的）な学校運営・教育に対する行政権の介入の制限・「合理的教育法」の推進といった主張がなされており、今日にかかわりの深いテーマが少なからず扱われているのである。<sup>5</sup>

このように牧口会長の提言、そして『体系』発刊の意義を踏まえ、教師の今日的在り方を考察したい。牧口会長は、こう語る。

現在の如き国定教科書が出来て、その運用の教師用の教科書も出来、その使用上の注意まで、親切丁寧ならざるなしてあつては、…（略）…或はロボットが進歩し、ラヂオが発達したならば、教材供給の教科書の外に、その運用法を導くことまでも、自働的に出来、この時こそ教師の失業問題で、真面目に社会が頭を悩ます時代が来るかも知れないといひ得ること前陳の通りである。<sup>6</sup>

現代も教科書は文部科学省による検定を受けており、さらには教材等の資料や指導方法の参考などもより一層容易に入手できる時代になった。またIT、AI教育も進歩を遂げている。最近の報道によると、子供が苦手な問題をAIが判断し、効率的に学習が進むように理解度に応じて問題を出題する個別教育プログラムまでであるという。<sup>7</sup>今日のロボットの時代を牧口会長は予見していたようである。だが、そうした便利さを生かす主体たる教師が真価を発揮して、教育の質を高めて欲しいという時代の要請はますます強まる情勢である。牧口会長の言う「失業の危機」は当面ないにしても、その果たすべき責任を厳しく評価される時代が到来していることは間違いない。

人間教育は、人間の手によって行われるものであり、その人間としての教師が、自らの職及び児童生徒の学習指導等をどう考え、どう実践するのか、反省をし、具体的対応をしなければならない、それが牧口会長の提起に応える道である。のみならず、それは次代への教育確立の道である。なぜなら、先の松本、熊谷両氏の意見とともに、「入学難、試験地獄、就職難等で一千万の児童や生徒が修羅の巷に喘いで居る現代の悩みを、次代に持越させたくないと思ふと、心は狂せんばかり」<sup>8</sup>というのが、牧口会長が『体系』樹立を志した所以であり、それは一個人の問題提起の実現だけでなく一国に関わる重大課題の解決を目指すものであるからに他ならない。本稿は、現代の教育状況を鑑み、本来の教師のあるべき姿と、これからの教師に必要な能力・資質について考察するものである。その根本理念を牧口会長の『創価教育学体系』に求

め、かつデンマークの教育の父グルントヴィの思想に触れたい。テキストは池田SGI会長とハンス・ヘニングセンの対談『明日をつくる`教育の聖業、デンマークと日本 友情の語り』(2009 潮出版社)である。

## 1. 『創価教育学体系』に学ぶ「啓発」と「教師の在り方」

### (1) 戦後の教育改革—特筆すべきもの

明治政府が1872年(明治5)に学制を定めてから、近代的な教育制度が作り上げられていった。1889年大日本帝国憲法発布により国家体制が整えられ、1890年の教育勅語によって教育の目的・目標が明らかにされた。そして義務教育の年限が6年となった。また1903年には教科書が国定となったのである。

1945年(昭20)8月終戦を迎えるが、戦後の教育改革は新教育建設の出発点となるものであった。戦時中の軍国主義教育を否定して行われ、当時の連合国軍最高司令部の要請に基づき、文部省が進めたものであるが、六・三・三・四制による学校体系の改革には注目と期待が集まった。ここに一様に四年制の大学となり、教員養成のための大学が生まれ、教員になるには教員免許が必要になった。

筆者の着目するのは、新学制による学校の授業の刷新を図るために行われた改善の内容である。要約して述べる。(『学制百年史』総説六戦後の教育改革文部省編 1971年 株式会社帝国行政学会 pp.38-39.) それは「学校の授業を刷新する目的で、児童の学習を指導する方法原理との新しい考え方として、まず児童・生徒の学習活動を尊重し、従来の注入主義を改める必要があることを明らかにした。また、討議活動や個人差に応ずる学習、さらに生活の中の問題をとらえ、経験をもととした単元学習が提唱された。同時に児童・生徒の地域における経験的学習活動を展開する方法が奨められた。このためには実験・観察・資料の収集などが必要であると主唱され、視聴覚教材の利用についても奨励された」ことである。こうした改善は児童生徒を中心にし、かつその主体性を促すものであり、それまでの注入主義教育から考えれば画期的なものである。期せずして、本稿の冒頭に示した牧口会長の問題提起が、時代が受け止めていたか否かに関わらず結果的に際立って見える改革の内容であると筆者は受け止める。その後には教育基本法や学校教育法などの法令の整備、学習指導要領による教育課程の編成などが進み、基礎・基本の重視や、いわゆる「生きる力」の育成等、文部省(文科省)、中央教育審議会(以後中教審と略す)により教育改革が進められてきた。学習指導要領の改訂も10年毎に進められてきた。詳細は省くが、改革が叫ばれる度に、児童生徒の自ら学ぶ意欲の向上や主体的学習が繰り返し謳われるのは、学習者中心の授業は依然として課題であり続けているということになる。この課題はもちろんとし、広く教育の解決の示唆を『体系』が与えてくれると熊谷はこう述べる。

『体系』は、明治以降の日本近代の教育が産み出した多くの矛盾を解決するこ

と、つまり近代教育の限界を克服することをめざして書かれており、今日の時代の教育とのつながりが深いし、これにさまざまな示唆を与えてくれるのである。<sup>9</sup>

この意義を踏まえて、『体系』のなかでどのような教師論が展開されているのか、牧口会長の教育思想を探っていく。

## (2) 牧口会長の教育思想—啓発主義、学習指導主義

### ① 教育の目的と教師

古川（2010）は「牧口常三郎の教師論に関しては、これまで、すでに、さまざまな考察がなされている。しかしながら、実際のところ、体系的かつ総体的な理解は、必ずしも得られていないように思われる」<sup>10</sup>と言う。その理由は定かではないが、氏の言うように、そうであるからこそ「真理は、協働の作業を積み重ねることによって、正直に求めていくしかない」<sup>11</sup>ということに共感を覚える。筆者もその一分として、体系的かつ総体的な理解は得られずとも、『体系』の中で論じられた「教師論」に対する考え方を導き、その現代的意義を探る考えである。

まず教育の目的は何か。牧口会長は、子どもの幸福が教育の目的であるとして次のように記している。

教育の目的たるべき文化生活の円満なる遂行を、如実に言ひ表はす語は幸福以外にはないであらう。…（略）…即ち被教育者をして幸福なる生活を遂げしめる様に指導するのが教育である。<sup>12</sup>

教育は児童に幸福なる生活をなさしめるのを目的とする。<sup>13</sup>

むろん幸福そのものは譲渡できない。ゆえに児童生徒がみずから幸福な生活を送ることができるように必要な力を身に付けさせる。それが教育の目的であると言うのである。今日ではこのことはそれ程意外ではないように聞こえるかも知れないが、『体系』発刊当時の昭和5年は軍部の大陸侵攻が始まった年であり、忠君愛国を謳う時代である。そのような時に、教育の目的が「子どもの幸福」にあると断言したことは驚愕に値する事実である。

では、その教育の目的に向かって、教育改革を目指し、教育改造を唱える牧口会長が第一義にしたものは何か。それが教師の存在である。

『体系』第三巻の緒言において牧口会長は、「教師は従来速成的常識のみであっては、人の子を賤うのみであると謂ふ点に透徹した教育観を以て教育改造の任に」<sup>14</sup>当たたることを願うとしている。そして職の重要性に鑑み、教育事務の特質を挙げる中で次のように述べる。

六 他の職業の部分的なるに反して教師の仕事は全人格の価値付けを目的とし、あらゆる職業に従事出来る完全なる人物の基礎を作るにあるが故に、教師の智識の準備の範囲は左の二方面に互らねばならぬ。

- ・各教科の全体に通ずる教材の智識。
- ・各教材を理解応用指導すべき方法上の智識及技能。<sup>15</sup>

上記は、小学校教師に関するものであるが他にも通じる。さらに教師は「直接的教育機関」であるとし「教育事業遂行上一番大切なるもの」であるとしている。<sup>16</sup> また「教育の改造に於ける根柢は教師であって」<sup>17</sup>とまで言い切り、教師が不完全では教育改善は不可能であると強調する。近年、文科省を中心に教育改革が叫ばれ、進められてきたが、その要たる教師の改革が思うようにいかない状況である。改革が校長室までに留まったという声もあった。したがって、重ねての主張になるが、ここに健全たる教育実現の鍵は教師論を明らかにすることである。

次に牧口会長は、教師の仕事は時勢の進歩に応じて変遷するとして四期に分けてこれを論じている。第一期から第三期までは部分引用し、特に第四期を詳しく記す。

第一期 知識の伝授を本務とした時代。第二期 同じ知識の伝授にしても理解、記憶に便なる様に整理することに骨折った時代。第三期 … (略) …教師の力は教材の選択排列よりは被教育者の理解、記憶、応用の指導に注がれるようになった時代。第四期 自然現象、社会現象の生活環境に直接観察をなさしめ、その研究手引きとして教科書を駆使する様に学習指導をなす時代。即ち国語読本の如きも表現形式の類例を提供する経済的手段として使用させる時代。<sup>18</sup>

第四期の「直接観察」につながる事柄であると思われるが、教材の提供についても「なるべく教材それ自身をして直接児童に物語らせる」<sup>19</sup>ことを重視していると述べている。ここに教師の児童との関わりの基本がみられる。そして、さらに幼児の教育についてさえも、学習者の活動を尊重するよう配慮点を記している。

しかし幼年生には教師が教材に成り変つての代弁並に感応作用の奨励を最も必要とする。但しそれはあくまで補助作用に留むべく学習者それ自身の活動でなければ、如何に教師が外部から骨折つても何の役にも立たぬもので、本人の活動あつてこそ初めてその効果を顕すものであることを忘れてはならぬ。<sup>20</sup>

こうして、かつての教師は、知識の記憶及び理解をさせるだけのものであったが、時代の変遷の中で「今後は被教育者の日常生活の環境そのままを教材として、之を評価し認識せしめ、その真相を知らしめ、価値を獲得させる為の補助者とし奨励者とし警戒者として、其の任務を完うすべきであることを自覚せねばならぬ」<sup>21</sup>として教師の在り方を、その任務から定義付けて、時代に応じての教師の意識改革の必要性を唱えている。さらに教師の位置を進化論的に三期に分けて述べている<sup>22</sup>が、ここでは詳細は省略する。ただ重ねて今後の教師の使命を具体的に語っている。

此故に今後の教師の使命は寧ろ教へ方の上手、即ち教材の運用、児童の理解の徹底、記憶の徹底、その応用の徹底といふことにあらねばならぬ。<sup>23</sup>

この論について当時の学者の批判も想定しながらも牧口会長は、「教授材料さへも会得出来ない様な教師は問題とするに足らぬ。… (略) …只今後の教師の仕事の最も

大切な任務は…（略）…其の材料を運用して被教育者に理解させ記憶させ、活用させる事であらねばならぬ<sup>24</sup>と繰り返し主張している。次元は異なるが、近年、大学の授業が一方向的な講義形式であることの見直しも図られ、可動式の机の配列により学生の討議や参加型を取り入れ、大学におけるいわゆるアクティブラーニングが進められているのも「教へ方」の工夫であり、被教育者の理解を深める手立てが要請されている一つの姿ではないだろうか。

## ② 教師の在り方

では牧口会長が、なぜ教育技師としての教師論を主張したのか。理想的な教師としての人格等はどうなのか。これについて、熊谷は、牧口会長は現場や教師の実態を熟知していて、教育の大衆化の時代ゆえに大量の教師が必要になるので人格優秀な人物は期待できないとして、厳しい現実認識のもとに牧口会長の示した最低限度の教師の基準を次のようにまとめている。<sup>25</sup>

- ① 職務の遂行に必要な職業的知識の素養、教育学をその職業に応用し得るのに必要な学力、加えて社会の進歩、変化に遅れないようにするための研究心と理解力。
- ② 専門的知識の理解に必要な基礎として、また教材の認識、評価の指導に欠かせない準備として、中等学校（旧制）卒業程度以上の学力、一般に高等普通教育の素養。
- ③ 社会としての学校のなかで、他者と共同生活をいとなむことに耐えられるだけの社会学的意識。具体的には指導者としての人格、専制的監督に満足しないで立憲政体的監督（法規にもとづく民主的監督＝熊谷注）を行うにふさわしい集団理解、さらに全体の目的を認識して公平公正に人事問題を処理し得るに必要な人格的修養と明確な社会意識。

熊谷は、さらに、教育技師としての資格を求めたからといって牧口会長は教師の道徳性が不要とはしていないと述べ、「実は、教育技師であるということには、知行合一を核とする道徳性が本質的な要素として含まれているのである<sup>26</sup>という。時代の現状を厳しく見つめ、教育の目的が子どもの幸福にあるとし、教師は児童の補助者たれとした牧口会長の慧眼は鋭く、熊谷も次のように評価しているが筆者も同感である。

牧口は、リアルな現状認識と近代的な感覚をもって教師の在り方を構想した。

教職の専門性が問われている今日、彼の教師論は、鋭い説得力をもって我々に語りかけてくる。<sup>27</sup>

まさに教育は国家百年の計。今の私たちに牧口会長の思想が問いかけてくるというのである。ところで牧口会長は実際にどのような教師を理想としているのか。その実例はあるのか。実は牧口会長はペスタロッチを理想の教師としているのである。牧口会長独自の見解として、ペスタロッチのすぐれた点について、次のように述べている。

二つ引用する。

教育学上の真理の発見者であるとするものである。少くとも発見の先駆、教育の革命者、教育の科学的建設の先覚者として教育史上に、従つて文化史上に不朽の地位を占むるものと断定するものである。<sup>28</sup>

ペスタロッチの功績は、彼の遺した教育方法上の格言である。即ち彼の見出した教育方法上の真理で、彼の東洋古来の哲学者達が書斎の中に於て瞑想によりて作つたものとは違ふ。教育者一生の貴重なる経験の賜として産出された者で、血と汗から搾取したエキスである。

教育法につき教育学史に曙光を示したものが之なるが故に貴いのである。<sup>29</sup>

牧口会長自身もそうであるが、実践家としての経験から真理を導く。血と汗のにじむ実践から教育学上の真理を表した。そうした点で共通のものがあると筆者は考える。一方、ペスタロッチをはじめヘルバルトやペーコンなどの理想が時を経ても実際に生かされず、世界の教育がその理想通りに進歩していないと考えた牧口会長は、それらが演繹的、哲学的なまま継承されたことに理由があるとし、そのことが自身の研究方法を期した理由になったと次のように述べている。

これ吾人が教育の事実から帰納して教育の原理に到達せんとする研究方法を採つた所以である。即ち実際の経験の成功將た失敗の事実を自然科学的方法によつて観察し比較し総合し、以て真理に到達し、斯くて教育学を経験的応用科学の組織に至らしめた所以である。もしも吾々教育實際家が真にペスタロッチを模範として忠実に其の理想を実現せんならば是非共茲に到らねばならぬと信ずるのである。<sup>30</sup>

これは、学者の理論だけでなく教育實際家の研究方法が肝要であることを示しており、教師の実践的研究法が真理に到達する道であると説いているものと思われる。

ここまでの考察を通して、牧口会長の指摘する教師の仕事というものが、知識の切売りや詰め込み主義ではなく、学習指導技師であるとの結論が見えて、本稿の冒頭に引用した問いかけの答えの解明につながったと考える。冒頭に掲げた「前者」すなわち教師の職が知識の卸売りであるとき「後者」は何であったのか。その答えは次の一節にある。

もしも後者であるならば、医術、工芸等の技師や、絵画、彫刻などの芸術家と同様になり、しかもその中に於て、人間を素材とする最高級の芸術家として、教師は永久に生命を有し、且つ文化の発達と共に、益々其の価値を發揮することになるであらう。<sup>31</sup>

本稿冒頭の問いかけの答えをここに出すのは順不同で理解しにくいと思うが、今までの教師論の一つの結論的な表現としてここに引用した次第である。特に「人間を素材とする最高級の芸術家」とは究極の教師像ではないだろうか。

## ③ 啓発主義、学習指導主義

では、その学習指導技師たる教師の職について、牧口会長が強調したと思われる視点を押さえない。それはどのような視点か。池田 SGI 会長はヘニングセンとの対談集（池田大作・ハンス・ヘニングセン『明日をつくる`教育の聖業、デンマークと日本 友情の語り』潮出版社、2009 年.）において「啓発」という言葉に触れて述べている。

小学校の校長であった牧口会長も、「教育の本質」とは、「知識の伝授即詰め込主義にあらずして、啓発主義、学習指導主義である」と論じておりました。<sup>32</sup>

そこで、牧口会長の言う啓発主義、学習指導主義に視点をあて、教師論を進める。この視点について牧口会長は事例を挙げて説明している。いずれも『体系』に紹介されたものであるが、ここに引用したい。

つひ此頃、横浜に於ける少壮篤学教師の為に教育学の講義をして居た所が、偶々六年生の理科教授に於て、とんだ失策をしたといふ一教師の実話があつた。曰く『今日に限つて、不用意に教壇に上つた所が、突然児童に課題の「ナマコに骨がありますか」と問はれて面喰つた。考へる余裕もないので、「当然骨はない。」とやつと逃げたが、さて愈々教科書を教へて見ると、立派に「有る」とあるではないか。今度ばかりは絶体絶命、とうとう参つて仕舞つた』と。<sup>33</sup>

この事例について牧口会長は、教師は知識の伝達者という根本的錯覚があるからこういう失策をするとし、教科書にあることを教えるのではなく「知識することの指導」が大事だと述べている。<sup>34</sup> すなわち、それが教師の本務であるというのである。他にも、ある小学校長が教員に訓示した中に「修身において啓発が必要である」とあった例をあげ、啓発は修身のみではないとも述べている。<sup>35</sup> 牧口会長の教師論における「教師の本務」は、「知識することの指導」つまり、それは、「啓発主義、学習指導主義」であると筆者はとらえた。啓発主義については『体系』の脚注（熊谷一乗、木全力夫による）に次のようにある。

（2）啓発主義 知的関心を喚起し、知的活動を刺激・助成して自らの力で知識を獲得するように仕向けるいきかた、知識を探究することに興味をおぼえさせ、自らすすんで意欲的に取り組むように導き自発的な知的活動を積極的に展開させる方針。開発主義といわれることもあり、詰め込み主義あるいは注入主義に対抗する用語。<sup>36</sup>

ではなぜこのような啓発主義を唱えたのか、もう少し詳しく検証していきたい。『体系』発刊前後は、繰り返し述べられているように、知識の詰め込み主義が横行していた。未知の知識を伝えることによって価値としていた。そのような中で、牧口会長は、印刷術の発達した今日は、知識の伝達という教師の役割は分離したと説き、それでも残る役割は「知識といふ名前前で表はされて居る真理若くは道徳を、人生に応用して価値を創造する力の啓培を図ることである」<sup>37</sup>とする。ここに言う「啓培」は

『体系』の脚注(4)に熊谷、木俣により示されているが、「啓発し養い発達させること」<sup>38</sup>とある。つまり真理や道徳を人生に応用して価値を創造する力を啓発し養うことであるとしている。詳しく言えば「言語によつて代表される真理を認識し、記憶するばかりでなく、それを生活に応用して、善と利と美とを創造する能力を増大する様、被教育者を嚮導することが、即ち教師の本務だといふことである」<sup>39</sup>として、教師の本務を定義付けているのである。

こうして明らかになった学習指導主義は啓発主義に基づく教育法である。その学習指導主義の重要なポイントは何か。熊谷は次の4点をあげている。

- ① 学習すること、知識を求めることに興味、喜びをもたせる指導。(学習への興味、知識への関心を喚起する指導)
- ② 自分の力で知識を習得し、さらに探求、開発することができる方法を会得させる。(知識の宝庫を開く鍵を与えること)
- ③ 発明発見にいたる過程を体験させる。知識の基本構造について、その生成の過程を経験をとおして理解させる。(発見学習の理論に通じている。)
- ④ 観察と理解と応用の方法を獲得させる。

知識する、ことを経験させ、その喜び、楽しさを実感させて、知識にいたる方法を体験させる、というところに学習指導主義の要点がある。<sup>40</sup>

被教育者である子どもの喜びや楽しさをいかに実感させるかと考える、そこに学習指導主義が子どもを前に出した考え方であると筆者は考える。

この観点から、牧口会長が改めて教育と教師について述べている箇所がある。すなわち、

教育は最優最良の人材にあらざれば成功することの出来ぬ人生最高至難の技術であり芸術である。是は世上の何物にも代へ難き生命といふ無常宝珠を対象とするに基づく。…(略)…この最高至難なる重職に選ばれたる教師は、地位の尊厳を想ふに就ては、何よりも先づ先覚の遺したる全経験の継承をなすが上に、それを具体化して、彼の人の子を賊はぬだけの練習を積むこと、医師の如くならねばならぬ。それが為に先づ以つて、仕事の目的観に対して明確なる見識を持ち、盲目的機械的の不経済なる労働に陥らざることを期せざるべからず。<sup>41</sup>

さて、牧口会長の「啓発主義、学習指導主義」の概略が少しく明らかになり教師の本務や必要な資質の真理も見えてきたと考える。そこで次に「啓発」といえばデンマークの教育の父といわれたグルントヴィの思想が思い起こされる。その思想における「啓発」の意味を探り、牧口会長との共通点を押さえつつ教師の在り方の考察をしていきたい。時代や国の違い等々の中で筆者の浅識の叶わないところであるので、前掲のヘニングセンと池田 SGI 会長との対談を道案内に進めていくものである。

## 2. グルントヴィの教育思想における「啓発」と「教師」

### (1) グルントヴィ「生の啓発」と「相互作用」

#### ① 生の啓発と国民高等学校

デンマーク近代教育の父と言われたグルントヴィは次のように述べる。

遺憾ながら、我々は死のための学校を知りすぎるほどよく知っている。そうだ、それを知っているだけではない。我々は「死せる言語」に依拠することでその名誉を保っている学校では、文法的完璧さや語彙目録の完全さが、生を費やし、生の犠牲を通じて当の学校が近づこうと努力する理想であると認める。<sup>42</sup>

氏は、当時のデンマークの学校が暗記や試験、立身出世のための競争をさせているとして、それらを「死の学校」と呼んだ。そして理想の学校「フォルケリ（フォルケ）・ホイスコーレ（以後ホイスコーレと略す）」について、次のように言っているのである。

しかしながら、不自然で暴君的な学校に対抗する唯一の手段は自然で自由な学校であって、民属・民衆が、書物や死せることばに基づく偽りの啓蒙に対抗して自らの精神的自立性を維持できる唯一のあり方は、真の啓蒙に努力することである。この啓蒙は生に淵源を有し、母語を生きいきと学校で利用することから生まれる。その恩恵はフォルケリ・ホイスコーレの創設によって生み出すことができるのである。…（略）…むしろ、民属・民衆とその土地、母語にかかわって、それらの性格や性質、最近の状態や自然な改良と進歩が問われる。フォルケリ・ホイスコーレにおいて、市民それぞれに重要な諸々のことがらが、生ける相互作用の明るみのなかで扱われるのであり、死せる不毛な知識情報の対象として扱われるのではない。<sup>43</sup>

詩人としても有名なグルントヴィがマリエリュストのホイスコーレ開校に寄せた詩の一節に次のような表現がある。解放された自由な雰囲気表現に彼の思いがうかがえるようである。

こうしてマリエリュストに射し込んでくる  
君の朝焼けとともに、啓蒙の太陽が  
歌え、若鳥よ、君の胸いっぱい呼吸して  
けだし、母語は優しい響きを醸すのだから  
闇の脅威にもかかわらず  
光線の腕に抱かれれば  
光と暖かさによって  
デンマーク人は優しい

（「陽光は漆黒の土を照らす—マリエリュスト・ホイスコーレ開校によせて」）<sup>44</sup>

グルントヴィの「生の啓発」と、「生ける相互作用」から、彼の求めた教育、そしてそこから生まれる教師の在り方について考察を進める。いずれも、彼の教育思想、とりわけ本稿の目指す教師の在り方に直結する内容であると考えられるからである。

「生の啓発」は国民高等学校の設立で実際化する。グルントヴィ研究の第一人者であるヘニングセンは、グルントヴィと共にデンマークの近代教育制度の基礎を築いた教育者コルについて言及しながら述べている。

グルントヴィの思想に啓発を受けた最初の国民高等学校がオープンしたのが、一八四四年です。国民高等学校が、デンマーク社会に深く根を張り、発展していく原動力となったのが、後継者のコルです。私たちは現在、デンマーク社会の発展に重要な役割を果たしたグルントヴィとコルの思想を、世界的な規模で応用しようと考えております。<sup>45</sup>

グルントヴィとコルについては牧口会長も『体系』第一巻の緒言で語っており、国民高等学校の興隆はコルの功績が特に大きいと述べている。<sup>46</sup> デンマークの、グルントヴィとコルに始まった国民高等学校運動はまさに教育改革の道であった。それは牧口会長と、戸田城聖創価学会第二代会長との師弟のそれと似ているとしたものと考えられる。その後、創価学会第三代会長である池田 SGI 会長が創価教育の一貫校として、設立場所はそれぞれ異なるが、創価幼稚園、創価学園（小・中・高）そして創価大学を建設した。師弟のつながりを示すものである。国民高等学校は、性別、年齢、国籍、障害の有無等に関係なく、18歳を過ぎたら誰でも入学ができる「全寮制」である。但し資格や試験とは無縁である。フォルケ・ホイスコーレと訳されるこの学校はグルントヴィは「生のための学校」と呼んだ。それはヘニングセンによれば「対話による『生の啓発』を通して、自分を高めていった人々が、今度は、民主主義の担い手となって、社会を良くしていくのです」<sup>47</sup>とされている。さらに、ここでいう「啓発」とは「教育」という用語よりはるかに広い視野に立つものであり、「全体への理解に関わる言葉であり、そこには、社会的な側面や普遍的な側面が含まれるのです。<sup>48</sup>」と言う。日本語では「啓発」と訳されるが、この言葉は「オププリュースニング」と呼ばれる。これについてヘニングセンはこう定義する。

オププリュースニングとは、「啓蒙」という言葉に代表される科学的知識によって得られるものよりも、もっと共通性があり、基本的なもので、「生の啓発」というべきものです。「生の啓発」の主題は「生」です。それは感情や愛情も含みます。なぜなら生きることとは前進すること、元気を湧き出すことだからです。<sup>49</sup>

ここに母語を生き生きと活用し、「生の啓発」を目的とした対話で、自由に楽しく若者が学ぶホイスコーレが明確にイメージされる。資格が取れるかどうかではないと言うのである。では、国民高等学校の教育の目指したものは何か。目的は方法を導くものであるから、その方向性が教師の在り方につながると考える。寺田（2013）

は、牧口会長も、グルントヴィも共に、教育の目的を「人間の幸福」にあるとしたと述べている。<sup>50</sup> だが、その後それを確認する我が国の文献上の明確なものがないとし、2013年8月に学生と共にデンマーク研修に行った際、ヘニングセンとの語らいの場があり、その折に直接氏に質問して確かめてみたと言う。寺田への答えを引用する。

「グルントヴィは『幸福』という言葉は使っていないが、人々の『微笑み』とか『喜び』という言葉を使っている。底流では、牧口の考えと同じと言える。したがって、あなたの見方は間違っていないと思う<sup>51</sup>」

教育という言葉を使わずに「生の啓発」としたグルントヴィの目指したものは「人間の幸福」であり、牧口会長の教育の目的と一致しているのである。それぞれが唱えた教育改革は子どもの幸福・人間の幸福が目的であり、そのための学校、教師の改革であった。その根本が「啓発」という理念であったと言ってよいと筆者は考える。

## ② 教師と学生の相互作用

では、そのような学校で教師と学生とのかかわりはどのようになされるのか。もう少し詳しく考察したい。それは筆者が注目する「啓発」と並ぶ二点目の「相互作用」である。グルントヴィは、ホイスコーレが、デンマークではまったく新規な「啓蒙の施設」であるとした上で、そこにおける教師と若者のかかわりについて、こう語る。

それは、民衆がしだいに自意識に目覚めるような場であり、若者が教師・指導員から多くを学ぶと同様に、教師・指導員が若者から多くを学ぶ、そのような生きいきとした相互作用と相互教育の場であろう。<sup>52</sup>

これが前述したように「生ける相互作用」としたグルントヴィの主張なのである。池田 SGI 会長もヘニングセンとの対談において、ホイスコーレが画一的な知識の詰め込みではなく、<sup>53</sup> 全人教育、であるとして次のように述べる。

この学校では、少人数のクラスで、教師と学生の「生きた言葉」による対話を基調とし、「啓発」を重視していく。そこから「生きる意味を考える学校」とも呼ばれてきましたね。<sup>53</sup>

これに対してヘニングセンも「はい」と応じ、前述したように、ホイスコーレが対話による「生の啓発」を大事にしたとの立場から、「しかし教師は、決して対話をしようと強制してはいけません。教師も同じ仲間として輪の中に入って、そのなかの一人として対話に参加するのです」<sup>54</sup> という。教師は、「生きた言葉」による対話をする。そして、そこにおける「啓発」が大切であると。このことは被教育者の「知識すること」を教える牧口会長の啓発主義と重なってみえる気がする。次元は異なるが、牧口会長も対話を重視し、自ら各地の座談会に足を運び、友の悩みに耳を傾けて励ましを送ったという記録も残っていると池田 SGI 会長が紹介している。<sup>55</sup>

ところでグルントヴィの言語観は児玉（2016）によればヘルダーの影響があるとしている。児玉は、ヘルダーの『言語起源論』（1772）を取り上げ、当時、言語は神か

ら与えられたものとされていた考えを否定し、言語の起源を人間にあるとしたということを書いてこう記す。

人間の精神的発展の成果として言語を捉えたヘルダーは、子どもの成長を周囲の刺激に鼓舞されて内在的潜在能力が顕れた結果であるとし、潜在能力を顕在化する学習過程において重要なものが言語と歴史であるとしたのである。グルントヴィもまた、ヘルダーの言語観を継承し、言語を国民の文化を創造していく不可欠な要素として捉えていた。さらにグルントヴィは活字としての言葉ではなく、生活の中の「生きた言葉 (det levende ord)」にこそ、その力があると考えたのである。<sup>56</sup>

「生きた言葉」による対話、相互交流。教師も被教育者から学ぶ。筆者はここに、古代ギリシャの哲人ソクラテスの教師像との一致点を見出す。村井(1993)はソクラテスの「無知の知」を取り上げ「教育とは『子供を善くする』ことであるが、その『善さ』とは誰も知らないのだ」と主張したと述べる。そしてソクラテスの独特の教師像を次のように記している。

教師は、親であれ、大人であれ、子どもたちを「善く」しようというものであるかぎり、同じく「善さ」が何であるかを知らないものとして、子どもたちの仲間であり、友人であるのでなければならない。そして一緒に「善さ」を探っていくのでなければならない。ソクラテス自身は、自らそういう生き方をして、当時若者たちにさまざまな生活上の知恵や知識を教授することを職業としたソフィステス(教師)たちと自分を区別して、生涯、自分を教師とは呼ばず、ただ若者たちの「友人」「仲間」と呼んだといわれる。<sup>57</sup>

ソクラテスの「問答法」「助産術」の名で呼ばれる教育法も、こうした考えから生まれたものであると考えられる。グルントヴィも教師と学生が「同じ仲間」としているがこれと共通するものがある。ヘニングセンは、グルントヴィの名付けた「生きた相互作用」が池田SGI会長がつねづね言う「対話」の精神と共通しているとし、こう述べる。

学生に教えるだけでなく、学生からも学ぶ可能性こそが、授業への欲求を大いに生み出し、授業を続ける欲求をも掻き立てる要素です。なぜならば、どんな「対話」も、すべて「新しい対話」であるからです。グルントヴィの言う、この「相互作用」こそが、教育に関わるすべての原動力となるべきです。<sup>58</sup>

つまり教師と学生の相互交流の大切さを伝えているのである。この事は牧口会長が、教師はあくまで被教育者の補助者、誘導者、産婆役や補助者であるとしたこととも繋がる。牧口会長は、教師と被教育者が友達や仲間であるとは言わないまでも、驕らずに、児童の幸福を目的にし児童自ら知識することを教える教師の姿勢は「相互作用」に通じるものと筆者は考える。そうであれば、教師が上で、児童や学生が下であるという論理は成立しない。また、補助者や同じ仲間であれば、目の前の教師が模範であ

るということではない筈である。牧口会長は、知識伝授を主とする教師は、自ずと教師の模範主義に陥るとして、教師は自らを被教育者の模範としてはならないと、こう述べている。

もしも教師が模範とならねばならぬのが、教育の本質であるとせば、それは教材としてではなく、教育の方法上でなくてはならぬ。教育完成の結果の模範を自ら示すにはあらずして、完成を目標として精進する過程を示す所の模範でなければならぬ。おれが如く偉くなれといふような傲慢の態度を示して、子弟を率ひるのではなくして、余が如きものに満足してはならぬ、更に偉大なる人物を目標として進まねばならぬ。といふ謙遜の態度を以つて子弟を導き、それが為には余と共に、余が進みつゝあるが如くに進めと、奨励するこそ、教師のなさねばならぬ正当の途である。<sup>59</sup>

「余と共に」「余が進みつつあるが如く」の部分に、児童と共に学ぶ者であるという姿が明らかに見える。グルントヴィ、ソクラテスらとの教師観の一致を強く感じるものである。ヘニングセンは、教師の姿勢というものについて次のように言う。

教師は、どこまでも啓発、進歩、自由といった人類に恩恵をもたらすものを勝ち取るために、進取的な姿勢で戦わなければなりません。だからこそ、教師という職業には、特別な意味合いがあります。<sup>60</sup>

進んで新しいことを取り入れる姿勢に児童・被教育者・若者の模範がありそこに啓発があるということであると筆者はとらえた。さらに、相互作用についても繰り返し語る。

私にとって教えることの魅力とは、つねに「教える側」と「学ぶ側」の間の相互作用にあります。つまり、「教える側」も、学生たちと共に学び続けることができ、与えられた課題に対しての理解を求めていくなかで、共により深い洞察に達することができるのです。<sup>61</sup>

### ③ 教師の在り方

そして、ヘニングセンは、自分自身を導いてくれた事柄を「座右の銘」として6点あげながら教師の在り方を語る。途中、③と④の間にいくつかの説明は入るが、その点についての詳細は省く。グルントヴィの教育思想を踏まえた研究者・実践家のものとして、グルントヴィの教師論を考える上で重要と考え、引用する。

- ① 才能、能力、考え方に関係なく、あらゆる学生を人間として尊重しなければならない。
- ② つねに自分が関心をもつ科目、自分が研究している科目を可能なかぎり教えるべきである。
- ③ あらゆる訓育は、学生と教師の相互作用のなかでなされねばならない。  
教師が答えを急かしたり、学生が素早く答えられないことに不安をいだかせて

はいけない。また、学生がよい答えを出せなくて、沈黙の時間が過ぎてしまうことへの恐れをいだかせないのが教師の役目である。その意味で、教師は授業のあとには、必ず反省の時間をもつべきである。

- ④ 教師は、自分自身をリフレッシュし、何ものにも煩わされなくて、自由に思索する時間を与えられるべきである。教師が精神的に成長が止まると、教師としても停滞が始まる。
- ⑤ 教師は学生に資するためのみに教鞭をとるのではない。教師は自分自身に資するためにも教鞭をとるのだ。もし自身の授業から得るものがなければ、それは授業をやめるべきときか、教えるべき科目を替えるときである。
- ⑥ 教師はつねに、どんな学生に対しても、その人がもつ最良の能力と特質を發揮するよう、励まさなければならない。また校長は、同僚の教師全員に対して、彼らもっている最良の資質の開花を促す自由を与えねばならない、です。<sup>62</sup>

これらが、ペスタロッチについて牧口会長が語ったように、まさに実践家の経験から生まれた言葉であることを実感する。ここで、あわせてグルントヴィがホイスコーレにはどのような教員が必要と考えていたのか、それを探り、そのなかから普遍的な教師像の在り様を考察していきたい。

ホイスコーレに必要な教師をグルントヴィは次のように語る。(下線は筆者)

民属・民衆性や祖国、母語が陶冶形成や啓蒙の生きいきとした中心点で、人々がそれを促進し、普及することに努めているのであれば、当然のことですが、母語に熟達した教師が少なくとも一人はいなければなりません。…(略)… その教師は共通の母語と親密にふれあい、その知見を生きいきと若者に対して伝える、母語の恵みであり喜びであるものとして伝えるよう努力をしなければなりません。…(略)… また少なくとも一人は、祖国の歴史になじんで愛好し、それを生きいきと語れるような人がいなければならないでしょう。…(略)… そしてまた少なくとも一人は、古いものと最近のものを含めて民衆歌謡、フォークソングになじみ愛好する人がいなければならないでしょう。…(略)…

さらに、少なくとも一人は祖国をよく巡視して、町々の状態やそれぞれのもつ独自に美しい景色だけでなく、民衆のことも、彼等の娯楽や職業、支配的な考え方も知っているような人がいなければならないでしょう。…(略)… 最後に、ローマ法を気にせずに、若者に過去と現在にわたる祖国の国家体制と立法について、真の観念と生きいきとしたイメージとを与えるような法律家が一人いることが、たいへん望まれることであります。しかし、そのような「デンマーク語」法律家は今は見つけにくいでしょうから、若者に祖国の歴史の全体を語る役割の人がその要求を満たすよう、できるだけ辛抱強くその任に当たらなければならないでしょう。<sup>63</sup>

日本とデンマークでは、学校に対する考え方や位置づけが異なるので、単純な比較

はできないが、このような教師を揃えれば、広く必要な学びが出来、学ぶ意義を理解し、自由で楽しいホイスコーレになるとのグルントヴィの理想を見た思いで、母語を愛し、生き生きとそれを語り合う教師と学生の姿がそこにあることを知らされる。これに比べて、果たして我が国の教師の、母国語に対する愛着、そしてその価値を如何に教育に生かしているかどうか、その点の反省の必要を感じつつ、教師論の一考察とする次第である。

### 3. 時代の変遷と教師—文科省の考え

#### (1) 時代の変遷と教師

前述したように、牧口会長は、教師の仕事は時勢の進歩に応じて変遷していると述べている。グルントヴィも同趣旨のことを言っている。そしてヘニングセンも語っている。

しかし残念なことに、近年、デンマークでは、教師という職業があまり重んじられない面があります。教師は「制度における事務官」とみなされ、「人間を育てる」尊い担い手とは考えられていない場合が多々あります。…(略)…学校では、社会に役立つ人間を育てるだけでなく、「人間を育てる」啓発を与えゆく教育が大事なのです。もし、このことが守られなければ、「啓発」の精神は衰退し、世界の真の進歩と自由の可能性も死滅するのではないのでしょうか。<sup>64</sup>

とその危機を語る。

今まで考察してきた教師論を今日に生かして考えるとき、今日の我が国の教育は果たして何を指向し、時代に応じる教師をどのように捉えているのかを考えたい。それは文科省の考えを探ることである。なぜかと言えば我が国の公教育はもちろん、私立の学校の教育においても国の文部行政のもとにあるからである。従って前述してきた教育思想や教育論を、そのまま当てはめることは適当ではないが、考察してきた「啓発」や「相互作用」などから今日的な教育理念を吟味することは出来るし、それは大事なことであると考え。国の定めた教育内容を、例えば、児童生徒の幸福のために、学校や児童の実態に応じて学習指導方法を創造するのが教師の使命であると考えからである。

#### (2) 児童の現状の考察

##### ① 生徒指導の現状—教育荒廃の当時に返って

戦後、新しい指導の考え方、方法として生徒指導が導入された。文科省では、『生徒指導資料第一集(改訂版)』の中でこう定義する。「生徒指導は、一人一人の児童生徒の個性の伸長を図りながら、同時に社会的な資質や能力・態度を育成し、さらに将来において社会的に自己実現ができるような資質・態度を形成していくための指導・

援助である」<sup>65</sup>と。そして、その生徒指導の現状について、この資料の「まえがき（旧版）」にはこう述べられている。

現在、学校における生徒指導上の諸問題は、極めて多岐なものとなっています。…（略）…不登校や中途退学、いじめや暴力行為などの諸問題も、依然として深刻な状況が見られます。また、学校外においても、少年非行の多様化が見られるところです。<sup>66</sup>

いじめは、学校側の努力にもかかわらず年々増加の一途をたどっている。最近の文科省の調査では、小中学校、高校、特別支援学校におけるいじめの認知件数は、過去最多の32万3,808件となっている。<sup>67</sup>生徒指導上の問題は、昭和50年代中ごろから社会問題化し、いわゆる受験競争の過熱化とともに教育荒廃の状況を生んだ。では、こうした荒廃や生徒指導上の問題を生んだ要因は何であったのか。当然、家庭、学校、社会そして時代の変化等、複雑な要因が絡み合っているには違いない。それでもよくよく考察し、真の原因を見極めることが大切である。そこで、昭和59年に発足した臨時教育審議会（以後臨教審と略す）で審議された内容を取り上げる。少年非行がピークに達するときの状況に立ち返ることに意味があると考えからである。特に昭和60年の臨教審第一次答申から教育荒廃の要因・背景に関する記述の要約を示す。学校・教師に関わる①～⑥を抜粋する。<sup>68</sup>

- ① 著しい経済発展は、教育の量的拡大をもたらすとともに、学歴偏重の社会的風潮を一層助長し、偏差値偏重、知識偏重の教育によって、子どもの多様な個性への配慮に乏しい教育となっている。
- ② 教育の量的拡大により、児童生徒の能力適性などは多様になったが、画一性の弊害が現れてきている。
- ③ 教育内容が増加し高度化し、いわゆる詰め込み教育、画一的な教育・指導に陥っている傾向があり、学業についていけない者がみられる。
- ④ 一部には指導力の不足したり使命感に乏しい教師がおり、また校長がリーダーシップを発揮できず、学校・教師に対する尊敬や信頼を薄くさせている状況がある。
- ⑤ 学校が教師中心の発想になり、子どもの立場から見る姿勢が乏しくなりがちであり、また、父母や地域に対して閉鎖的で、家庭、学校、地域間の協力が不十分となっている。
- ⑥ 学校教育における徳育が十分な成果を挙げていない。

複数の要因があったとしても、上記を見ただけでも、学校・教師の責任は大であると言わざるを得ない。経済発展により教育量が増大したとしても、知識偏重になっては時代が逆戻りしてしまう。そして、教師の指導力不足により被教育者たる児童の立場に立てなくなる。こうしたことでは教育が荒廃するのは、かつて教育改革を主張した教育思想家らからすれば当然のことではないだろうか。従って荒廃時の起点に戻り

反省をすることが望まれる。ここを変えなければ教育改革が掛け声を繰り返すだけになりかねない。

## ② 学習指導の現状と児童に育成する資質能力—三つの柱

では児童の学力と学習状況はどうか。平成28年12月21日の中教審答申を見る。この答申では、今後2020年から2030年の時代、社会はグローバル化や少子高齢化、AIなどさらなる激しい変化が、予測できない状況であるとした。そしてそのような時代に、児童生徒に育成する能力をどのようにとらえ育成するのか。新しい学習指導要領の改訂に向けて2014年(平26)11月に中教審へ諮問がされて以降、議論が積み重ねられ、2016年(平28)12月に「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(以後答申と略す)として改訂の方向性がまとめられたのである。

まず子どもの学力の現状については、国内外の学力調査では近年改善傾向にあり、国際的に上位に位置し、平均点も高いとしている。<sup>69</sup>

だが、課題についても結論的に次のように述べられている。

こうした調査結果からは、学ぶことと自分の人生や社会とのつながりを実感しながら、自らの能力を引き出し、学習したことを活用して、生活や社会の中で出会う課題の解決に主体的に生かしていくという面から見た学力には、課題があることがわかる。<sup>70</sup>

生活に価値創造するとした牧口会長、真の生を生きるとしたグルントヴィの主張が重なってくる。一番重要とされる生活や社会に生かす学力に課題があるというのだ。

このような課題を踏まえ、其の答申の中で、これから育成すべき資質・能力が三つの柱として整理、発表された。次の三つである。

- ① 何を理解しているか、何ができるか(生きて働く「知識・技能」の習得)
- ② 理解していること、できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)
- ③ どのように社会、世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)<sup>71</sup>

ここでの注目点は、③の「どのように社会、世界と関わり、よりよい人生を送るか」である。知識を活用し、社会、世界と関わり、よりよい人生を送ることは、まさに牧口会長提唱の教育の目的である「幸福」そのものの追求ではないだろうか。グルントヴィの「啓発」により「生の喜び」を知ることにも関わっていると筆者は考える。

### (3) これからの教員に必要な資質・能力

では、そのような資質・能力を育成するためにどのような学習指導方法が大事か。答申では「アクティブ・ラーニング（主体的・対話的な深い学び）」が大事であるとして授業の改善を求めている。まさに被教育者の興味・関心を大切に、自ら考え、他との対話を通して深め合う「啓発」により「知識する」学習指導主義の実践に他ならない。そして、さらにこのような教育の実現に向けての教師の在り方に言及する。それは、1997年（平9）文科省の教育職員養成審議会の第一次答申であった。その中で、現在の「教員をめぐる状況」について述べ、学校教育の成否が教員の資質・能力に負うところが極めて大きいとし、時代の変化の中で必要な教員の資質、優れた教員の条件を6点にわたってあげている。すなわち、教員に求められる資質・能力を次のように発表しているのである。<sup>72</sup>

1. いつの時代にも求められる資質・能力
2. 今後特に求められる資質・能力
3. 得意分野を持つ個性豊かな教員

また優れた教師の条件を大きく集約すると以下の三つであるとしている。

1. 教職に対する強い情熱
2. 教育の専門家としての確かな力量
3. 総合的人間力

上記の「いつの時代にも求められる（教員の）資質・能力」及び「今後特に求められる（教員の）資質・能力」の詳細を見ていきたい。時代の変遷と共に、教育が何を求め、教員はどうあるべきかを探るためである。答申は次のように記している。

#### 〈いつの時代にも求められる（教員の）資質・能力〉

教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養、これらを基盤とした実践的指導力等

#### 〈今後特に求められる（教員の）資質・能力〉

地球的視野に立って行動するための資質・能力（地球、国家、人間等に関する適切な理解、豊かな人間性、国際社会で必要とされる基本的資質・能力）、変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力（課題探求能力等に関わるもの、人間関係に関わるもの、社会の変化に適応するための知識及び技術）、教員の職務から必然的に求められる資質・能力（幼児、児童・生徒や教育の在り方に関する適切な理解、教職に対する愛着、誇り、一体感、教科指導、生徒指導等のための知識、技能及び態度）

おわりに

上記の資質・能力は総花的でありかつ多様であり覚えることさえも難しい。まして、これらを完璧に具えることができる人はおそらく皆無であろう。時代の変化に生きることは教師とても児童生徒と同じである。従って教師自身も時代の変化に対応する能力が必要になるのは必然の理である。そこで、これらの列挙された資質・能力をもつ模範の教師になるのではなく、これらの資質・能力を身につけるために、児童生徒と共に学び努力する、その過程における模範たろうとすること。その姿を通して児童生徒の「啓発」を図ることが大切ではないだろうか。本稿の求めてきたものが文科省の方針と符合する部分も多く、牧口会長やグレントヴィ等の教育理念が、今日的教育改革の要件としていかに学ぶに値するものであるかが分かる。理念を生かす実際的なものとしてである。ひとえに前述した学校そして教師のあり方を、時代を超えて今に生かしていきたいと願う次第である。

限られた紙面で意を尽くせず、読まれた方のご批判・ご叱責を乞う次第である。

注

- 1 牧口常三郎（1983）『牧口常三郎全集 第6巻 創価教育学体系（下）』 第三文明社 p.241.
- 2 同上. p.242.
- 3 松本昭（2004）『教師よ、最高の芸術家よ 牧口常三郎の創価教育と日本の`道の文化、』アールズ出版 p.3.
- 4 同上. p.63.
- 5 熊谷一乗（1994）『創価教育学入門』レグルス文庫 217 第三文明社 p.265.
- 6 牧口常三郎（1983）前掲 pp.246-247.
- 7 読売新聞 2017年12月14日付朝刊 13面.
- 8 牧口常三郎（1982）『牧口常三郎全集 第5巻 創価教育学体系（上）』 第三文明社 p.8.
- 9 熊谷一乗（1994）前掲 p.265.
- 10 古川敦編（2010）『牧口常三郎の教師論』論創社 はしがき ii .
- 11 同上.
- 12 牧口常三郎（1982）前掲 p.124.
- 13 同上. p.130.
- 14 牧口常三郎（1983）前掲 p.7.
- 15 同上. p.34.
- 16 同上. p.38.

- 17 同上. p.98.
- 18 同上. pp.51-52.
- 19 同上. p.53.
- 20 同上. pp.53-54.
- 21 同上. pp.55-56.
- 22 同上. p.56.
- 23 同上. p.57.
- 24 同上. p.58.
- 25 熊谷一乗 (1994) 前掲 p.214.
- 26 同上. p.216 「知行合一」は『体系』第一巻の緒言〈牧口 (1982) p.6〉で述べられている。王陽明の説で、認識と実践は不可分であり一体であるとの概念で、牧口会長の思想のキーコンセプトであると熊谷は言う。〈熊谷 (1994) p.92.〉
- 27 同上. p.217.
- 28 牧口常三郎 (1983) 前掲 p.81.
- 29 同上. p.83.
- 30 同上. p.87.
- 31 同上. p.243.
- 32 ハンス・ヘニングセン・池田大作 (2009) 『明日をつくる `教育の聖業、デンマークと日本 友情の語らい』潮出版社 p.22.
- 33 牧口常三郎 (1983) 前掲 p.243.
- 34 同上. pp.243-244.
- 35 同上. p.244.
- 36 同上.
- 37 同上. p.247.
- 38 同上.
- 39 同上.
- 40 熊谷一乗 (1994) 前掲 pp.195-196.
- 41 牧口常三郎 (1983) 前掲 pp.253-254.
- 42 グルントヴィ (2014) 『ホイスコーレ 〈上〉小池直人訳』風媒社 p.135
- 43 同上. p.103. (文中、小池は「啓発」を「啓蒙」と訳す。)
- 44 グルントヴィ (2015) 『ホイスコーレ 〈下〉小池直人訳』風媒社 pp.274-275.
- 45 ハンス・ヘニングセン・池田大作 (2009) 前掲 p.15.
- 46 牧口常三郎 (1982) 前掲 p.9.
- 47 ハンス・ヘニングセン・池田大作 (2009) 前掲 p.22.
- 48 同上.
- 49 同上. p.215.

- 50 寺田治史 (2013) 「デンマークと日本の人間教育 (I) - 池田・ヘニングセン対談が示唆するもの -」太成学院大学紀要第 15 巻 p.179.
- 51 寺田治史 (2014) 「デンマークと日本の人間教育 (II) - 対話による啓発 -」太成学院大学紀要第 16 巻 p.183.
- 52 グルトヴィ (2015) 前掲 p.31.
- 53 ハンス・ヘニングセン・池田大作 (2009) 前掲 p.20.
- 54 同上.
- 55 池田大作 (2018) 『随筆 永遠なれ創価の大城』 聖教新聞社 p.175.
- 56 児玉珠美 (2016) 「グルントヴィの教育理念の今日的意義」名古屋女子大学紀要第 62 号 (人文・社会編) p.196.
- 57 村井実 (1993) 『教育思想 発生とその展開【上】』 東洋館出版社 p.37.
- 58 ハンス・ヘニングセン・池田大作 (2009) 前掲 p.23.
- 59 牧口常三郎 (1983) 前掲 p.286.
- 60 ハンス・ヘニングセン・池田大作 (2009) 前掲 p.224.
- 61 同上. p.230.
- 62 同上. pp.228-232.
- 63 グルトヴィ (2015) 前掲 pp.67-69.
- 64 ハンス・ヘニングセン・池田大作 (2009) 前掲 p.223.
- 65 文部科学省 (平成 21 年) 『生徒指導資料第一集 (改訂版)』 国立教育政策研究所生徒指導研究センター p.2.
- 66 同上. iii.
- 67 文科省 (平成 29 年) 「平成 28 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(速報値) について 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 pp.2-3.
- 68 文部科学省 (平成 21 年) 前掲書 pp.4-5. ここでは臨時教育審議会の第一次答申 (昭和 60 年) から要約し教育荒廃の要因・背景を①~⑩まで挙げている。
- 69 中央教育審議会答申 (平成 28 年) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」 p.5 の中で「国際教育到達度評価学会 (IEA) が平成 27 年に実施した国際数学・理科教育動向調査 (TIMSS2015) においては、小学校、中学校ともに全ての教科において引き続き上位を維持しており、平均得点は有意に上昇している。また、経済協力開発機構 (OECD) が平成 27 年に実施した生徒の学習到達度調査 (PISA2015) においても、科学的リテラシー、読解力、数学的リテラシーの各分野において、国際的に見ると引き続き平均得点が高い上位グループに位置しており、調査の中心分野であった科学的リテラシーの能力について、平均得点は各能力ともに国際的に上位となっている」と記している。

70 同上. p.6.

71 同上. pp.28-31.

72 文部科学省（平成9年）『新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（教育職員養成審議会・第1次答申）』 pp.2-4.

## **Enlightenment and Education**

### **—A Study of the Role of Teachers—**

**Hideo ISHINO**

Tsunesaburo Makiguchi, the first president of Soka Gakkai, severely criticized knowledge cramming education and advocated enlightenment and learning guiding by publishing “The Theory of Value-Creating Pedagogy”. N.F.S. Grundtvig, father of modern education in Denmark, also criticized the school education of his time and founded the Folkehøjskole (Folk High School), “a school for life”.

Thinking that “Enlightenment” in the philosophy of both Makiguchi and Grundtvig is necessary for modern education and teachers, I study the role of teachers through the dialogue between Hans Henningsen and Daisaku Ikeda. Moreover, I set it as a practical theory in the modern context by mentioning the image of teachers pursued by MEXT.